

# 唄立山心中一曲

泉鏡花

青空文庫



「ちらちらちら雪の降る中へ、松明がぱつと燃えながら二本——誰も言うことでもございませぬが、他にいたし方もありませんや。真白な手が二つ、悚然とするほどな婦人が二人……もうやがてそこら一面に薄り白くなつた上を、静に通つて行くのでございませぬ。正体は知れていても、何しろそれに、所が山奥でございませぬ。どうもね、余り美しくつて物凄うございませぬ。」

と鑄掛屋が私たちに話した。

いきなり鑄掛屋が話したでは、ちと唐突に過ぎる。知己になつてこの話を聞いた場所と、そのいきさつをちよつと申陳べる。けれども、肝心な雪女郎と山姫が長襦袢で顛れたようなお話で、少くとも御覧の方はさきをお急ぎ下さるであらうと思う、で、簡単にその次第を申上げる。

所は信州姨捨の薄暗い饅飩屋の二階であつた。——饅飩屋さえ、のつけに薄暗いと申出るほどであるから、夜の山の暗い事思ふべしで。……その癖、可笑いのは、私たちは月

を見ると言つて出掛けたのである。

別に迷惑を掛けるような筋ではないから、本名で言つても差支えはなからう。その時の連つれは小村雪岱こむらせったいさんで、双方あちらこちらの都合上、日取が思う壺つぼにはならないで、十一月の月上旬、潤うるうどし年の順におくれた十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事であつた。

——居待月である。

一杯飲んでいる内には、木賊とくさ刈るといふ歌のまま、研みがかれ出づる秋の夜の月となるであらうと、その気で篠しのノ井で汽車を乗替えた。が、日の短い頃であるから、五時そこそこというのにもうとつぷりと日が暮れて、間は稲荷山いなりやまただ一丁場ひとちょうばだけれども、線路が上りで、進行が緩い処へ、乗客が急に少く、二人三人と数えるばかり、大な木の葉がぱらりと落ちたようであるから、掻合かきあわす外がい套との袖そでも、妙にばさばさと音がする。外は霜である。山の深さも身に沁しみる。夜よさえそぞろに更け行くように思われた。

「来ましたよ。」

「二人きりですね。」

と私は言つた。

名にし負う月の名所である。ここステーションの停車場を、月の劇場の木戸口ぐらいな心得違いを

していた私たちは、幟のぼりや万燈まんどうには及ばずとも、屋号をかけた弓張提灯ゆみはりちようちんで、へい、茗荷屋ようがやでございませす、旅店の案内者ぐらいは出ていようと思つたの大きな見当違ちがひ。絵に描いた木曾の棧橋かけはしを想わせる、断崖がけの丸木橋のようなプラットフォームへ、しかも下りたのはただ二人で、改札口へ渡るべき橋もない。

一人がバスケットと、一人が一升壺びんを下げて、月はなけれど敷板の霜に寒い影を映しながら、あちらへ行き、こちらへ戻り、で、小村さんが唇をちよつと曲げて、

「汽車が出ないと向うへは渡られませんよ。」

「成程。線路を突切つつきつて行く仕掛けなんです。」

やがてむらむらと立昇る白い煙が、妙に透通さつつて、颯さつと屋根へ掛かかる中を、汽車は音もしないように静しずかに動き出す、と漆うるしのごとき真暗まつくらな谷底へ、轟ごうと訶ごする……

「行つていらつしやいませ……お静しずかに——」

と私はつい、目の前まへをすれすれに行く、冷たそうに曇つた汽車の窓の灯あかりに挨拶あいさつした。

ここへ二人きり置いて行かれるのが、山へ棄すてられるような気がして心細かつたからである。

壇はあるが、深いから、首ばかり並んで霧の裡なかなる線路を渡つた。

「ちよつと、伺いますが。」

「はあ？」

手ランプを提げた、真黒な扮装の、年の少い改札掛わずかに一人。

待合所の腰掛の隅には、頭から毛布を被つたのが、それもただ一人居る。……これが伊勢だと、あすこを狙つて吹矢を一本——と何も不平を言うのではない、旅の秋を覚えたので。——小村さんは一旦外へ出たが、出ると、すぐ、横の崖か巖を滴る、ひたひたと清水の音に、用心のため引返して、駅員に訊いたのであつた。

「その辺に旅籠屋はありましようか。」

「はあ、別に旅籠屋と言つて、何ですな、これから下へ十四五町、……約半道ばかり行きますと、湯の立つ家があるですよ。外は大概一週間に一度ぐらいなものですなあ。」

「あの風呂を沸かしますのが。」

「さよう。」

「難有う——少しどうも驚きました。とにかく、そこいらまで歩いてみましょう。」  
と小村さんが暗がりの中を探りながら先へ立つて、

「いきなり、風呂を沸かす宿屋が半道と来たんでは、一口飲ませる処とも聞きにくうござ

いますよ。しかし何かしらありますよ……何しろ暗い。」

と構内の柵について……灯の百合が咲く、大な峰、広い谷に、はらはらとある灯をたよりに、ものの十間とは進まないで、口を開けて足を噛む狼のような巖の径に行悩んだ。

「どうです、いつそこへ蹲んで、壇詰の口を開けようじゃありませんか。」

「まさか。」

と小村さんは苦笑して、

「姨捨山、田毎の月ともあろうものが、こんな路で澄ましているって法はありません。きつと方角を取違えたんでしよう。お待ちなさいまし、逆に停車場の裏の方へ戻ってみましょう。いくらか燈が見えるようですよ。」

双方黒い外套が、こんがらかって引返すと、停車場には早や駅員の影も見えぬ。毛布かぶりの瘦せた達磨の目ばかりが晃々と光って、今度はどうやら羅漢に見える。

と停車場の後は、突然荒寺の裏へ入った形で、芬と身に沁みる木の葉の匂、鳥の羽で撫でられるように、さらさらと——袖が鳴った。

落葉を透かして、山懐の小高い処に、まだ戸を鎖さない灯が見えた。

小村さんが、まばらな竹の木戸を、手を拵げつつ探り当てて、

「きつと飲ませますよ、この戸の工合ぐあいが気に入りました」  
 と勢いきおいよく、一足先に上ったが、程もあらせず、ざわざわざわと、落葉を鳴らして落来るばかりに引返して、

「退却……」

「え、安達あだちヶ原ですか。」

と聞く方が慌あわてている。

「いいえ爺さんですがね、一人土間で草鞋わらじを造つくっていましてね。何だ、誰たれじやいッて喚わめくんです。」

「いや、それは恐縮おそく々々。」

「まことに済みません。発起人はつしじんがこの様子で。」

「飛んでもない。こういう時は花道を歌で引込ひっこむんです、柄にはありませんがね。何でしたっけ、……」

わが心なぐさめかねつ 更科さらしなや

姨捨山に照る月をみて

照る月をみて慰めかねつですもの、暗いから慰められて可いいわけです。いよいよ路が分



らなければ、停車場ステーションで、次の汽車を待つて、松本まで参りましょう。時間がありますからそこは氣丈夫です。」

しかるところ、暗がりに目が馴なれたのか、空は星の上に星が重かさなつて、底そこなく晴れている——どこの峰にも銀の覆輪ふくりんはかからぬが、自おのから月の出の光が山の膚はだを透とおすかして、巖いわの欠かけめも、路の石も、褐かへいろ色に薄く蒼味あおみを潮さして、はじめ志した方かすかへ幽かすかながら見えて来た。灯あかり前の木の葉は白く、陰なる朱葉もみじの色も浸にじむ。

かくして辿たどりついた薄暗い饅頭屋であつた。

何なんしろ薄暗い。……赤黒くどんより煤すすけた腰障子の、それも宵ながら朦朧もうろうと閉とつていて、よろず荒もの、うどんあり、と記した大おおな字が、軒いびきをかいていそうに見えた。

この店の女房が、東京ものは清潔きれいすぎだからと、氣を利かして、正札のついた真新しい湯沸ゆわかしを達引たてひしてくれた心意氣に対しても、言われた義理ではないのだけれど。

「これは少々酷ひし過ぎますね。」

「ここまで来れば、あと一辛抱で、もうちとどうにかしたのがありましょう。」

実は、この段、囁ささき合つて、ちようどそこが三岐みつまたの、一方は裏山へ上る山岨やまそばの落葉の径こみち。一方は崖を下る石ころ坂の急なやつ。で、その下りる方へ半町ばかりまた足探り試

みたのであるが、がけの陰になつて、暗さは暗し、路は悪し、灯は遠し、思切つて逆戻りにその鰻鮓屋を音訪れたのであつた。

「御免なさい。」

と小村さんが優しい穏な声を掛けて、がたがたと入つたが、向うの対手より土間の足許を俯向いて視つつ、横にとぼとぼと歩行いた。

灯が一つ、ぼうと赤く、宙に浮いたきりで何も分らぬ。釣ランプだが、火屋も笠も、煤と一所に油煙で黒くなつて正体が分らないのであつた。

が凝視める瞳で、やつと少しずつ、四辺の黒白が分つた時、私はフト思いがけない珍しいものを視た。

二

かまち 框の柱、てんびんぼう 天秤棒を立掛けて、なべかま 鍋釜の鑄掛の荷が置いてある——亭主が担ぐか、場合に依つてはこうした徒の小宿でもするか、鑄掛屋の居るに不思議はない。が、珍らしいと思つたのは、薄汚れた鬱金木綿の袋に包んで、その荷に一挺、紛うべくもない、三味線

結え添えた事である。

話に聞いた——谷を深く、麓を狭く、山の奥へ入った村里を廻る遍路のような渠等には、小唄浄瑠璃に心得のあるのが少くない。行く先々の庄屋のもの置、村はずれの辻堂などを飯の住居として、昼は村の註文を集めて仕事をする、傍ら夜は村里の人々に時々はやりの流行唄、浪花節なども唄つて聞かせる。聞く方では、祝儀のかわりに、なくても我慢の出来る、片手とれた鍋の鑄掛も逃えろといった寸法。小児に飴菓子あめがしを売つて一手踊つたり、唄つたり、と同じ格で、ものは違つても家業の愛想——盛場の吉原にさえ、茶屋小屋のおかつぱおたばこぼん 盆ぼんに飴を売つて、爺じいやあつち、婆ばばやこつち、おんじやらこつちりこ、ばあばあと、鳴物入で鮓たことおかめの小人形を踊らせた、おん爺じいがあつたとか。同じ格だが、中には凄すこいような巧うまいのがあるという。

唄いながら、草や木の種子たねを諸国に撒まく。……怪しい鳥のようなものだ、その三味線が、ひとりで鳴くように熟じつと視みた。

「相談は整いました。」

「それは難ありがたたい。」

「きあ、二階へどうぞ……何なんしろ汚ないんでございますよ。」

と、雨もりのような形が動く、紺の上被を着た婦になつて、ガチリと釣ランプを捻つて離して、框から直ぐの階子段。

小村さんが小さな声で、

「何しろこの体なんですから。」

「結構ですとも、行暮れました旅の修行者になりましょうね。」

「では、そのおつもりで——さあ、上りましょう。」

と勢よく、下駄を踏違えるトタンに、

「あつ、」と言つた。

きやんきやんきやん、クイ、キュウと息を引いて、きやんきやんきやん、クイ、クウン、きゆうと鳴く。

見事に小狗を踏つけた。小村さんは狼狽しながら、穴を覗くように土間を透かして、

「御免よ……御免よ……仕方がない、御免なさいよ。」

で、遁げないばかりに階子を上ると、続いた私も、一所にぐらぐらと揺れるのに、両手を壇の端にしっかり縋つた。二階から女房が、

「お気をつけなさいましよ……お頭をどうぞ……お危うございますよ、お頭を。」

「何なに。」

吻ほっとしながら、小村さんは氣競きおつたように、

「踏ふ着づけられた狗から見りや、頭あたまを打ぶつけるなんぞ何でもない。」

日頃、沈着な、謹み深いのがこれだから、余程周章あわてたに違ちがいない。

きやんきやんきやん、クイツ、キユウ、きやんきやんきやん、と断きれ々ぎれに、声こゑが細こつて泣な止やまない。

「身みに沁しみますね、何ですか、狐きつねが鳴ないでるように聞きえます。」

木き地の古ふるびたのが黒くろ檀たんに見みえる、卓ちや子ぶ台だいにさしむかって、小村さんは襟えりを合あせた。

件くだんの油煙あぶらけで真ま黒くろで、ぽつと灯あかりの赤あかいランプの下したに畏かしこままつて、動うごくたびに、ぶるぶると畳たたみ

の震ふるう処ところは天あま変かに對たいし、謹かしこんで、日蝕にじくを拝かむがごとく、少なからず肝かんを冷ひやしながら、

「旅たびはこれだから可いいんです。何も話わの種かたです。……話わの種かたと言いえばね、小村さん。」

と、探たずらないと顔かほが分わらぬ。

「はあ。」

「何なにですか、この辺あたりには、あわれな、寂さびしい、物語ものがたりがありそうな処ところですね。あの、月宵つきのよ 鄙いひな物語ものがたりというのがあります、御存ごぞんじでしようけれど。」

「いいえ。」

「それはね、月見の人に、木曾の麻衣あさぎぬまくり手したる坊さん、というのが、話をする趣向になつてゐるんですがね。（更科山さらしなやまの月見んとて、かしこに罷登りけるに、大なる巖いわにかたかけて、肘折れ造りたる堂あり。観音を据え奉れりたてまつ。鏡台とか云う外山とやまに向いて、）……と云うんですから、今の月見堂の事でしょう。……きつとこの崖の半腹にありましようよ。……そこの高欄におしかかりながら、月を待つ間のお伽にとて、その坊さんが話すのですが、菌原山そのほらやまの木賊刈とくさがり、伏屋里ふせやのさとの箒木ははきぎ、更科山の老桂ふるかつら、千曲川の細石いし、姨捨山の姥うばのいし石いしなぞツて、標題みだしばかりでも、妙にあわれに、もの寂しくなるのです。皆この辺の、山々谷々の事なんでしょう。何なんにしる、

信濃なる千曲の川のさゞれ石も

君しふみなば玉とひろはん

と言う場所なんですもの。——やあ、明るくなつた。——  
と思わず言つた。

釣ランプが、真新しい、明あかるいのに取換つたのである。

「お待遠様、……濟みません。」

「どういたしまして、飛んだ御無理をお願い申して。」

女房は崩れた鬢びんの黒い中から、思いのほか白い顔で莞爾にっこりして、

「私どもでは難有ありがたいんですございますけれども、まあ、何しろ、お月様がいらっしつて下さると可いんですけれども。」

その時、一列に蒲鉾かまぼこ形がたに反そつた障子を左右に開けると、ランプの——小村さんが用心つるに蔓おさを圧おさえた——灯ひとが一お煽おり、山さ気が颯さつと座まに沁ひみた。

「一昨晚の今頃は、二かさも三かさも大おおい、真ま円まんいお月様が、あの正面へお出いでなさいましてございますよ。あれがね旦那、鏡台きようだい山さんでございませうがね、どうも暗くうございまして。」

「音に聞いた。どれ、」

と立つと、ぐらぐらとなる……

「おつと。」

欄干かたつむりにつかまって、蝸かたつむり牛うしという身で、背を縮めながら首を伸ばし、

「漆で塗ぬったようだ、ぼつと霧のかかった処とぎだは研出とぎだしだね。」

宵の明星きらりが晃然あおと蒼あおい。

「あの山裾やますそが、左の方へ入江のように拡がって、ほんのり奥に灯あかりが見えるでございませう。善光寺平ぜんこうじだいらでございましてね。灯のありますのは、善光寺の町なんでございませうよ。」

「何里あります。」

「八里ございませう。」

「ははあ。」

「真下の谷底に、ちらちらと灯ひが見えましよう、あそこが、八幡やはたの町でございましてね、お月見の方は、あそこから、皆さんが支度をなすって、私どもの裏の山へお上りになりませうでございませうがね。鏡台山と、ちようどさし向いになっております——おお、冷えますこと、……唯ただいま今お火鉢を。」

「小村さん、寸法は分りました、どうなすったんです、景色も見ないで。」

と座に戻ると、小村さんは真顔で膝ひざに手を置いて、

「いえ、その縁側に三人揃って立ったんでは、棧敷さじきが落ちそうで危険けんですから。」

「まったく、これで猿樂があると、……天狗が揺り倒しそうな処です。可恐おそろしいね。」

と二人は顔を見合せた。



が、注文通り、火鉢に湯沸が天上して来た、火も赫と——この火鉢と湯沸が、前に言  
 った正札つきなる真新しいのである。酒も銚子だけを借りて、持参の一升壇の爛をする  
 のに、女房は気障だという顔もせず、お客冥利に、義理にうどんを誂えれば、乱れても  
 すなおに銀杏返の鬢を振って、

「およしなさいまし、むだな事でございます。おしたじが悪くって、めしあがられやしま  
 せんから。……何ぞお香のものを差上げましょう。」

その心意気。

「難有い。」

と熱爛三杯、手酌でたてつけた顔を撫でて、

「おかみさん。」

杯をずいとさして、

「一つ申上げましょう、お知己に……」

「私は一向に不調法ものでございまして。」

「まあ一盞。」

「もう、全く。」

「でも、一盞ぐらい、お酌をしましう。」

と小村さんが銚子を持ったのに、左右に手を振って、すべこるように、しかも軋きしんで遁にげ下りる。

「何だい。」

「毒だとも思いましたかね。してみると、お互の人相が思われます。おかみさん一人きりなんでしうかしら。」

「泊りましようか。」

「御串戯ごじょうだんを。」

クイツ、キュウ、クツク——と……うら悲かなしげに、また聞える。

「弱りました。あの狗いぬには。」

と小村さんはまた滅めい入いった。

のしのしみしり、大皿を片手に、そこへ天井を抜きそうに、ぬいと顛あらかれたのは、色の黒い、いが栗くりで、しるし半纏ぼんてんの上へ汚これくさった棒ぼう縞しまの大広袖おおびそでを被はつた、から脛すねの毛だらけ、図体おとこは大いが、身の緊しまつた、腰のしゃんとした、鼻の隆い、目の光る……年配ねんぱいは四十余あまり、稼かせ盛せきりの屈くつき竟ような山賊面さんぞくづら……腰にぼツ込んだ山刀の無いばかり、あの

皿は何んだ、ヘツヘツ、生首二個受取ろうか、と言いそうな、が、そぐわないのは、願あごに短い山羊髯であつた。

「御免なせえ……お香のものと、媽々衆が氣前を見せましたが、取っておきのこの奈良漬、こいつあ水ぼくてちと中でがす。菜ツ葉が食えますよ。長蕪ながかぶてつて、こころ一体の名物で、異おつに食えまさ、めしあがれ。——とところで、媽々衆のことづてですがな。せつかく御酒を一つと申されたものを、やけな御辞退で、何だかね、南蛮秘法の癩痺藥……あの、それ、何とか伝三熊の膏藥とか言う三題噺ぼなしを逆に行つたような工合で、旦那方のお酒に毒でもありそうな様子合あいが、申訳がございません。で、居候の私わつしに、代理として一杯、いんえただ一つだけ。おしるしに頂戴してくれるようにと申すんで、や、も、御覽とおりの通、不ぶ躩しつながら罷出まかりしました。実はね、媽々衆、ああ見えて、浮気もんでね、亭主は旅稼とらぎで留守なり、こちらのお若い方のような、おツこちが欲しさに、酒どころか、杯を禁たつておりますんでね。はツはツはツ。」

階子はしこの下から、伸上つた声がして、

「馬鹿な事を言わねえもんだ。」

と、むきになると、まるだしの田舎なまり。

「真鍮台め。」と言った。

「……真鍮台?……」

聞くと……真鍮台、またの名を銀流しの藤助と言う、金箔つきの鑄掛屋で、これが三味線の持ぬしであった。面構でも知れる……このしたたかものが、やがて涙ぐんで……話したのである。

三

「私わつしはね、旦那。まだその時分、宿を取つちやあいなかつたんでございます、居酒屋、と  
 いった処で、豆腐も駄菓子も突つくるみに売っている、天井に釣つるした蕃椒とうがらしの方が、燈ひよ  
 りは真赤まっかに目に立つてツた、皺しなびた店で、槽ぼた同然にしんの鯿へんぴに、山家片鄙きまはお極きまりの石斑魚いわなの煮  
 浸びたし、衣ころも川がわで嘔くいしばった武蔵坊弁慶の奥歯のようなやつをせせりながら、店前みせさきで、  
 やた一きめていた処でございましてね。

ちよつと私わつしの懐中合ふところあひと、鑄掛屋風情のこの容体では、宿が取悪とりにくかつたんでございま  
 すよ。というのが、焼山やけやまの下で、パツと一くべ、おへつとい様を燃もしたも同じで、山を

越しちやあ、別に騒動も聞えなかつたんでございますが、五日ばかり前に、その温泉に火事がありました。ために、木賃らしい、この方に柄相当のなんぞ焼けていて、二三軒残ったのは、いずれも玄関附だからちとたじろいだ次第なんでございますが。

ええ……温泉でございますか、名は体をあらわすとか言います、とんだ山中で、……

狼温泉——

「ああ、どこか、三峰山の近所ですか。」

と、かつて美術学校の学生時代に、そのお山へ抜参りをして、狼よりも旅費の不足で、したたか可恐い思ひをした小村さんは、聞怯をして口を入れた……嘔むがごとく杯を銜みながら、

「あすこじやあ、お狗様と言わないと山番に叱られますよ。」

藤助は真顔で、微酔の頭を掉つた。

「途方もねえ、見当違い、山また山を遙に離れた、峰々、谷々……と言えばね、山の中に島々と言う処があります、おかしいね。いやもつと、深い、松本から七里も深へ入った、飛驒の山中——心細い処で……それでも小学校もありや、郵便局もありましたっけが、それなんぞも焼けていたんでございましてね。」

山坂を踏越えて、少々平な盆地になった、その温泉場へ入りますと、火沙汰はまた格別、酷いもので、村はずれには、落葉、枯葉、焼灰に交つて、子鳥、頬白、山雀、鶺鴒、小雀などと言う、紅だ、青だ、黄色だわ、紫の毛も交つて、あの綺麗な小鳥どもが、路傍にはらはらと落ちてゐる。こいつあ、それ、時節が今頃になりますと、よく、この信州路、木曾街道の山家には、暗い軒に、糸で編んで、ぶら下げて、美しい手鞠が纏れたように売つてるやつだて。それが、お前さん、火事騒ぎに散らかつたんで——驚いたのは、中に交つて、鴛鴦が二羽……番かね。……

や、頂きます、ト、ト、ごぜえやさ。」

と小村さんの酌を、蓋するような大な掌で請けながら、

「どうもね、捨つて抱きたいようでがしたぜ。まさか、池に泳いだり、樹に眠つたのが、火の粉を浴びはしますめえ。売ものが散らばりましたか、真赤に染つた木の葉を枕で、目を眠つていましたよ。」

天秤棒一本で、天井へ宙乗でもするように、ふらふらふらふら、山から山を経歴つて……ええちようど昨年の今月、日は、もつと末へ寄つておりましたが——この緋葉の真最中、草も雲も虹のような彩色の中を、飽くほど視て通つた私もね、これには足が停

りました。

なんと……綺麗な、その翼の上も、一重敷いて、薄り、白くなりました。この景色に舞台が換つて、雪の下から鴛鴦の精霊が、鬼火をちらちらと燃しながら、すつと糶上つたようにね、お前さん……唯今の、その二人の婦が、私の目に映りました。凄うように美しゅうがした。」

と鑄掛屋は、肩を軟に、胸を低うして、更めて私たち二人を視たが、

「で、山路へ掛る、狼温泉の出口を通るんでございますが、場所はソレ件の盆地だ。私が飲んでいました有合御肴というお極りの一膳めしの前なんざ、小さな原場ぐらい小広うございますのに——それでも左右へ並ばないで、前後になつて、すつと連立つて通ります。

前へ立つたのは、蓑を着て、竹の子笠を冠つていました。……端折つた片褌の友染が、藁の裙に優しくこぼれる、稲束の根に嫁菜が咲いたといった形。ふつさりとした銀杏返が耳許へばらりと乱れて、道具は少し大きゆうがすが、背がすらりとしているから、その眉毛の濃いのも、よく釣合つて、抜けるほど色が白い、ちと大柄ではあります

が、いかにも体つきの婀娜な婦で、

(今晚は。)

と、通掛りに、めし屋へ声を掛けて行きました。が、※と燃えてる松明の火で、おくれ毛へ、こう、雪の散るのが、白い、その頬を殺ぐようで、鮮麗に見えて、いたいたしい。

いたいたしいと言えば、それがね、素足に上草履。あの、旅店で廊下を穿かせる赤い端緒の立ったやつで——しつとりとちと沈んだくらい落着いた婦なんだが、実際その、心も空になるほど気の揉めるわけがあつて——思い掛けず降出した雪に、足駄でなし、草鞋でなし、中ぶらりに右のつつかけ穿で、ストンと落ちるように、旅館から、上草履で出たと見えます。……その癖、一生の晴着というので、母さん譲りの裙模様、紋着なんか着ていました。

お話をしますうちに、仔細は追々おわかりになります——これが何でさ、双葉屋と言つて、土地での、まず一等旅館の女中で、お道さんと言う別嬪、以前で申せば湯女なんだ。

いや、湯女に見惚れていて、肝心の御婦人が後れました。もう一人の方は、山茶花と小菊の花の飛模様のコオトを着て、白地の手拭を吹流しの……妙な拵だと思えば……道理



こそ、降りかゝる雪を厭いとつたも。お前さん、いま結ゆいた立てと見える高島田の水の滴たりそうなの、対に照つた鼈べつこう甲の花はな筭そうがい、花はな櫛くし——この拵こしらえじゃあ、白襟しろえに相違ちがねえ。お化粧も濃こく、紅もさしたが、なぜか顔の色が透とき通りそうに血ちが澄すんで、品のいいのが寂さしく見えます。華きや奢しやな事は、吹ふつけるほどではなくても、雪ゆきを持った向むか風いかぜにや、傘かさも洋こ傘かさも持も切きれますめえ、被かぶりもしないで、湯ゆ女なと同じ竹の子笠たけのこがさを胸むねへ取とつて、襟えりを伏ふせて、俯うつむ向むいて行ゆきます。……袖そでの下したには、お位いは牌はいを抱かかいて葬ともらい礼らいの施せ主しゆに立たつたよううで、こう正ただしく端しやん然ぜんとした処ところは、視みる目めに、神かみ々ずしゆうごぎいます。何なにとなく容よう子すが四あ辺たりを沈しずめて、陰かげ気きだけれど、気き高たかいんでごぎいますよ。

同じ人間にんげんもな……鑄掛屋あおを一人土間どまで飲あらして、納戸なうどの炬燵こたつに潜ひそ込んだ、一いぜん飯いの婆ば々か々かなどと言てう徒あは、お道みちさんの（今いま晩ばんは）にただ、（ふわ、）と言いつたきりだ。顔かほも出でさねえ。その（ふわ、）がね、何なにの事ことアねえ、鼠ねずの穴あなから古綿ふるわたが千断ちぎれて出でたよううだ。

「ちと耳みみが疼いたいだな。」

と鮎あ鈍屋どんやの女房にようばうが口くちを入いれた、——女房にようばうは鑄掛屋あおの話わに引ひかれて、二階にがいの座ざに加かわつていたのである。

「そのかわり大まかなものだよ。店の客人が、飲さしの二合びんと、もう一本、棚ひっさより引攫らって、こいつを、井つっこへ突込んで、しばらくして、婦人おんなたちのあとを追ってぶらりと出て行くのに、何とも言わねえ。山は深い、旦那方のおっしゃる、それ、何とかって、山中曆日なしじゃあねえ、狼温泉なんざ、いつもお正月で、人間がめででえね。」

「ははあ。」

「成程。」

私たちは、そんな事は徒あだに聞いて、さきを急いだ。

「荷はどうしたよ。」

と女房が笑って言った。

「ほい忘れた。いや、忘れたんじやあねえ、一ぜん飯おきッばなに置放おきッばなしよ。」

「それ見たか、あんな三味線だつて、壺びんづめ詰二升ぐらいな値はあるでござんさあ、なあ、旦那方。」

「うむ、まったくな。」

と藤助は額おきを圧えて、

「おめででえのはこつちだつて、はッはッはッ。」

## 四

「さて旦那方、洒落や串戯じゃあねえんでございます。……御覧の通り人間の中の変な輩のような、こんな野郎にも、不思議なまわり合せで、その婦たちのあとを尾けて行かないやならねえ一役ついていたのでございましてね。……乗掛った船だ。鬱陶しくもお聞きなせえ。」

すつとこ被りで、

襟を敲いて、

「どんつくで出ましたわ……見えがくれに行く段取だから、急ぐにや当らねえ。別して先方は足弱だ。はてな、ここに色鳥の小鳥の空蟬、鴛鴦の亡骸と言うのが有ったつけど、酒の勢、雪なんざ苦にならねえが、赤い鼻尖を、頬被から突出して、へつぴり腰で嗅ぐ工合は、夜興引の爺が穴一のばら銭を探すようだ。余計な事でございませうがね——性が知れちやいまして、何だか、婦の二人の姿が、鴛鴦の魂がスツと抜出したようでなりませんや。この辺だつけど、今度は、雪まじりに鳥の羽より焼屑が堆い処を見着

けて、お手向にね、壇の口からお酒を――雫と思いましたが、待てよと私あ考えた、正  
 覺坊じゃアあるめえし、鴛鴦が酒を飲むやら、飲ねえやら。いつその事だと、手前の口へ  
 ね、喇叭と遣った……こうすりや鳥の精がめしあがると同じ事だと……何しろ腹中は鴛  
 鴦で一杯でございました。」

女房が肥った膝で、畳に当って、

「藤助さんよ。」

「ああ。」

「酒の話じゃあないじゃあないかね、ねえ、旦那方。」

「何しろ、そこで。」

と、促せば、

「と二人はもう雑木林の崖に添って、上りを山路に懸っています。白い中を、ふつふつ  
 と、真紅な鳥のたつように、向うへ行く。……一軒、家だか、穴だか知れねえ、えた、非  
 人の住んでいそうな、引傾いだ小屋に、筵を二枚ぶら下げて、こいつが戸になる……横  
 の羽目に、半分ちぎれた浪花節の比羅がめらめらと動いているのがありました、それが  
 宿はずれで、もう山になります。峠を越すまで、当分のうち家らしいものはございません

や。

水の音が聞えます。ちよろちよろ水が、青いように冷く走る。山清水の小流こながれのへりについてあとを慕いながら、いい程合で、透かして見ると、坂も大分急になった石碓道いしころみちで、誰がどつちのを解いたか、扱帯しごきをな、一条ひとすじ、湯女ゆなの手から後うしろに取って、それをその少いわか貴婦人きふじんてった高島田たかしまだのが、片手に控えて縫すがつています……もう笠は外して脊へ掛けて……絞しぼりの紅あかいのがね、松明たいまつが揺れる度に、雪に薄紫うすむらさきに颯さつと冴さえながら、螺旋らせんの道条みちすじにこう畝うねると、そのたびに、崖たけの緋葉もみぢがちらちらと映りました、夢のようだ。

視みる奴やつの方が夢のようだから、御当人ごとうじんたちは現うつかも知れねえ。

でその二人は、そうやって、雪の夜道を山坂かけて、どこへ行くんだと思おぼしめ召めす。

ここだて——旦那だんな。

藤助とうすけは息継いきつぎに呷ぐいと煽あおつて、

「この二階にがいから、鏡台山かがやいたまを——（少し薄明うすあかりりが映さしますぜ、月がしましよう。まあ、御緩ごゆるりなさいまし、）——それ、こうやって視みるように、狼温泉ろうおんせんの宿しゆくはずれの坂から横正面よこまへといった、肩かたでこう捻向ねじむいて高く上を視みる処ところに、耳みみはねえが、あのトランプのハアト形かいらに頭かしらを押立おしたった梟ふくろうヶ嶽たけ、梟ふくろう、梟ふくろうと一口ひとくちに称となえて、何嶽なにたけと言うほどじゃねえ、丘かみが一ひと座くら、その

頂<sup>てつぺん</sup>辺に、天狗の撞<sup>しゆもくづえ</sup>木杖といった形に見える、柱が一本。……風の吹まわしで、松明の尖<sup>さき</sup>がぼつと伸びると、白くなって躓<sup>あらかわ</sup>れる時は、耶蘇<sup>ヤソ</sup>の看板の十字架てつたやつにも似ている……こりや、もし、電信柱で。

蔭に隠れて見えねえけれど、そこに一<sup>ひとはり</sup>張<sup>テント</sup>天幕があります。何だと言うと、火事で焼けたがために、仮<sup>か</sup>ごしらえの電信局で、温泉場から、そこへ出張<sup>でば</sup>つているのでございます。

そこへ行くんだね、婦<sup>おんな</sup>二人は。

で、その郵便局の天幕<sup>うち</sup>の裡に、この湯女<sup>ゆな</sup>の別<sup>べつ</sup>嬪<sup>びん</sup>が、生命<sup>いのち</sup>がけ二年<sup>ごし</sup>越に思い詰めている技手の先生……ともう一人は、上州高崎の大資産家<sup>おおかねもち</sup>の若旦那で、この高島田のお嬢さんの婿さんと、その二人が、いわれあつて、二人を待つて、対<sup>てぼこ</sup>の手戟<sup>てぼこ</sup>の石突<sup>いしづき</sup>をつかないばかり、洋服を着た、毘沙門<sup>びしゃもんてん</sup>天、増長<sup>ぞうちようてん</sup>天という形で、五体を緊<sup>し</sup>めて、殺<sup>い</sup>気を含んで、呼吸<sup>き</sup>を詰めて、待構<sup>まちかま</sup>えているんでがしてな。

お嬢<sup>ごしんぞ</sup>さんの方は、名を縫子<sup>ぬいこ</sup>さんと言うんで、申さずとも娘ツ子<sup>むすこ</sup>じゃありません、こりや御新姐<sup>ごしんぞ</sup>……じゃあねえね——若奥<sup>わくおく</sup>様。」

峰の白雪、麓の氷、

今は互に隔てていれど、

やがて嬉しく、溶けて流れて、

合うのじやわいな。……

「私は日暮前に、その天幕張の郵便局の前を通つて来たんでございますよ。……ちようど狼の温泉へ入込みます途中でな。……晩に雪が来ようなどは思いも着かねえ、小春日和といった、ぼかぼかした好い天気。……」

もつとも、甲州から木曾街道、信州路を掛けちやあ、麓の岐路を、天秤で、てくてくて、路傍の木の葉がね、あれ性の、いい女の、ぽうとなつて少し唇の乾いたという容子で、へりを白くして、日向にほかほかして、草も乾燥いで、足のうらが擦つてえ、といった陽気でいながら、槍、穂高、大天井、やけに焼ケ嶽などという、大薩摩でもの凄いのが、雲の上に重つて、天に、大波を立てている、……裏の峰が、たちまち颯と暗くなつて、雲が被つたと思うと、箕で煽るように前の峰へ畝りを立ててあびせ掛けると、浴びせておいて晴れると思えば、その裏の峰がもう晴れた処から、ひだを取つて白くなりま

す。見る見るうちに雪が掛るんでございましてね。左右の山は、紅くなったり、黄色かつたり、酔つたり、醒めたりして、移つて来るそのむら雲を待っている。

といった次第で、雪の神様が、黒雲の中を、大な袖を開いて、虚空を飛行なさる姿が、遠くのその日向の路に、蠱斯ほどの小さな旅のものに、ありありと拝まれます。

だから、日向で汗ばむくらいだと言つた処で、雑樹一株隔てた中には、草の枯れたのに、日が映すかと思れば、何、瑠璃色に小さく凝つた竜胆が、日中も冷たい白い霜を囓んではいます。

が、陽の赤い、その時梟ヶ嶽は、猫が日向ぼっこをしたような形で、例の、草鞋も脚絆も擦つてえ。……満山のもみじの中に、もくりと一つ、道も白く乾いて、枯草がぽかぽかする。……芳しい落葉の香のする日の影を、まともに吸つて、くしやみが出そうなのを獅嚙面で、

( 鑄掛……錠前の直し。 )

すくツと立つた電信柱に添つて、片枝折れた松が一株、崖へのしかかつて立っています、天幕張だろうが、掘立小屋だろうが、人さえ住んでいれば家業冥利……

( 鑄掛……錠前直し。 ) ……



と、天幕とその松のあります、ちよつと小高くなつた築山つぎやまてつた下を……温泉場の屋根を黒く小さく下に見て、通りがかりに、じろり……」

藤助は、ぎよろりとしながら、頬ほつぺた辺を平手でたた敲いて、

「この人相だ、お前さん、じろりとよりか言いようはねえてね、ト行やつた時、はじめて見たのが湯女のその別嬪だ。お道さんは、半襟の掛つた縞の着ものに、前垂まえだれ掛、昼夜帯、若い世話女房といった形で、その髪の毛のいい、垢あかぬけ抜のした白い顔を、神妙うつつむに俯向うつむいて、鹿そ末まつな椅子に掛けて、卓テエブル子よりかに凭掛よりかつて、足袋を繕つくつていましたよ、紺足袋を……

(鑄掛……錠前の直し。) ……

ちよつと顔を上げて見ましたつけ。直すくに、じつと足袋を刺すだけ。

動いただけになお活いきて、光沢つやを持った、きめの細こまかな襟脚よの好きよななんとつちやねえ。

……通り切れるもんじゃあねえてね、お前さん、雲くもだか、風かぜだか、ふらふらと野道山道宿なしの身のほまちだ。

ひとこと

一言ぐらい口を利用して、渋茶の一杯も、あのお手からと思いましたがね、ぎよつとしたのは半分焦げたなりで天幕の端に真直まつすぐに立たつた看板だ。電信局としてある……

茶屋小屋、出茶屋の姉ねえさんじゃあねえ。風俗なりふりはこの目で確たしかに睨にらんだが……おやおや、

お役人の奥様かい。……郵便局員の御夫人かな。

これが旦那方だと仔細しさいねえ。湯茶の無心も雑作はねえ。西行法師なら歌をよみかける処だが、山家めぐりの鑄掛屋じやあ道を聞くのも跋ばつが変だ。

ところで、椅子はまだ二三脚、何だか、こちとらにや分らねえが、ぴかぴか機械を据附けた卓テエブル子こがもう一台。向つてきちんと椅子が置いてあるが、役人らしいのは影も見えねえ。

ははあ、来る道で、向の小山の土手腹むでつぽらに伝わった、電信の鋼線はりがねの下あたりを、木の葉の中に現れて、茶色の洋服で棒のようなものを持って、毛虫かむしが動くように小さく歩行あるしている形を視みた。……鉄砲打の鳥おどしかと思つたが、大きにそんなのが局員の先生で、この姉さんの旦那かも知れねえよ。

が何しろ留守だ。

(鑄掛……錠前直し。……)

と崖ぶちの日向ひなたに立つたが、紺足袋の繕い。……雪の襟脚、白い手だ。悚然ぞつとするほど身に沁みてなりませんや。

遙はるかに見える高山の、かげつて桔梗色ききょういろしたのが、すつと雪を被かいでいるにつけても、で、

そこへまず荷をおろしました。

(や、えいとこさ。 ) と、草鞋わらじの裏が空へ翻かえるまで、山端やまばたへどっしりと、暖かい木の葉に腰を落した。

間拍子もきつかけも渡らねえから、ソレ向うの嶽たけの雪を視みながら、

(ああ、降つたる雪かな。 )

とか何とか、うろ覚えの独ひとりごと言を言つてね、お前さん、

(それ、雪は鵝毛がもうに似て飛んで散乱し、人は鶴かくしやうを着て立って徘徊はいかいすと言えり……か。 )

なんのツて、ひらひらと来る紅べにいろ色の葉から、すぐに吸いつけるように煙草たばこを吹かしたが、何分にも鑄掛屋おやまじやあ納りませんな。

ところできて、首に巻いた手拭てぬぐいを取つて、払はたいて、馬士まごにも衣いしやう裳だだ、芳原かぶりと気取りましたさ。古三味線を、チンとかツンとか引搔ひっかきな鳴らして、ここで、内証で唄つたやつでさ。

峰の白雪、麓の水——

旦那、顔を見つこなし……極きまりが悪い……何と、もし、これで別嬪の姉さんを引寄せよう

という腹だ、おかしな腹だ、狸たぬきの腹だね。

だが、こいつあこちとら徒であいの、すなわち狸の腹鼓という甘術あまてだね。不気味でも、気障きざでも、何でも、聞く耳を立てるうちに、うかうかと釣出されずにやいねえんだね。どうですえ、……それ、来ました。」

と不意に振向く、階はしご子段だんの暗い穴。

小村さんも私も慄然ぞつとした。

女房はなおの事……

「あれ、吃驚びっくりした。」

と膝すりよで摺寄る。

藤助は一笑して、

「まずは、この寸法でございましてね、お道さんを引寄せた工合というのが、あはッはッ  
」

「見ない振、知らない振、雪の遠山とおよまに向いて、……溶けて流れてと、唄うたっているながら、後方うしろへ来るのが自然と分るね、鹿の寄るのとは違います。……別嬪わかひんの香かおりがほんのりで、縹き緞りように打たれて身に沁む工合が、温泉の女神おんながみさま様が世話に碎けて顛あらかれたようでございまして。……（逢いたさに見たさに）何とか唄やつて、チャンと句切ると、

（あの、鑄掛屋さん。）

と、初音はつねだね。……

視みると、朱塗の盆に、吸子きびしよ、茶碗を添えて持っている。黒繻子くろじゆすの引掛帯ひっかけおびで、浅葱あさぎの襟えりのその様子が何とも言えねえ。

いえ、もう一つ、盆の上に、紙に包んだ蝶々てつてつというのが載のっていました。……それがために讚ほめるんじやあねえけれど、拵こしらえねえで、なまめいたもんでしたぜ。人を喰くったこつちの芳原かぶりなんざ、もの欲きましそうで極きまりが悪わるくなつたくらいで。

（へい、へい、へい、こりや奥様、恐入りました。）

とわざとらしくも、茶碗をな、両手で頂たかかずにやいられなかつた。

姉ねえさんが、初々はつしい、しおらしい事を、お聞きなせえ、ぼうツとなつて、

（まあ、あんな事、私は奉公人なんですよ。）

さ、その奉公人風情が、生意気のようだけれど、唄をもう一つ唄って聞かしてもらえまいか、と言うんじやありませんかい。お眺あつらえが注文にはまった。こんな処でよろしければ、山で樹の数、幾つだつて構やあしませんと、……今度は（浮世はなれて奥山すまい、恋もりん気も忘れていたが、）……で御機嫌を取結ぶと、それよりか、やつぱり、先せんの（やがて嬉しく溶けて流れて合うのじやわいな）の方を聞かして欲しいと、山姫様、御意遊ばす。

藤助は杯でちよつと句切つて、眉も口も引ひきしま緊つた。

「旦那方の前でございませがね、こう中腰に、加しめかげん減の好い帯腰で、下に居て、白い細い指の先を、染めた草につくようにして熟じつと聞く。……聞手が、聞手だ。唄う方も身につまされて、これでもお前さん、人間交づきええ際もすりや、女出入でいりも知らねえじやあねえ。少わかい時を思い出して、何となく、我身ながら引入れられて、……覚えて、ついぞねえ、一生に一度だ。較くらべものによあなりません、むかし琵琶法師びわほうしの名誉なのが、こんな処で草枕山の神様に一曲奏でた心持。

と姉さんがとけて流れて合うのじやわいなと、きき入りながら、睫毛まつげを長くうつむいて、ほろりとした時、こつらも思わず、つい、ほろり……いえさ、この面つらだからポタリと出ま

した。」

と口では言いつつ声が湿った。

「(つかん事を聞きますけれど、鑄掛屋さん、錠の合鍵あいかぎを頼まれて下さいますか。) ……  
…と姉さんがね。

私わっしあこれを聞いて、ポンと両手を拍うった。

このくらいつく事は、私の唄が三味線につくようなもんじゃあねえ。

(鍵が狂ったんでございますかい。)

(いいえ、無いんですけれど。)

(雑作はがあせん、煙草三服飲うちむ間だ。)

そこで錠前を見て、という事になると、ちと内証事らしい。……しとやかな姉さんが、急に何だか、そわついて、あっちこっちみまわしましたが、高い処さにこう立つと、風が攫さらって、すつと、雲の上へ持つて行きゆそうで危あぶなツかしいように見えます。

勿論人影は、ぼツつりともない。

が、それでも、天幕テントの正面からじゃあ、気咎きとがめがしたと見えて、  
(済みませんが、こつちから。)

裏へ廻わると、綻びた処があるので。……姉さんは科よく消えたが、こっちは自雷也の妖術にアリアアリアだね。列子という身で這込みました。が、それどころじゃあねえ。この錠前だと言うのを一見に及ぶと、片隅に立掛けた奴だが、大蝦蟇の干物とも、河馬の木乃伊とも譬えようのねえ、皺びて突張つて、元斑の、大古物の大かい革鞆で。

こいつを、古新聞で包んで、薄汚れた兵児帯でぐるぐると巻いてあるんだが、結びめは、はずれて緩んで、新聞もぼさりと裂けた。そこからそれ、煤を噴きそうな面を出して、蘆の茎から谷覗くと、鍵の穴を真黒に窪ましているじゃありませんか。

(何が入っておりますえ。)

失礼な……人様の革鞆を……だが、私あつい、うっかり言った。

(あの、旦那さんのお大事なもののばかり。)

(へい、貴女の旦那様の?)

(いいえ、技師の先生の方ですが、その方のお大事なものが残らず、お国でおかくれになりました奥様のお骨も、たつたお一人ツ子の、かけがえのない坊ちやまのお骨も、この中に入つていらつしやるんですつて。)

と、こう言うんですね。」



小村さんと私は、黙って気を引いて瞳を合した。

藤助は一息ついて、

「それを聞いて、安心をしたくらいだ。技師の旦那の奥様と坊ちやまのお骨と聞いて、安心したも、おかしなものでございますがね、一軒家の化葛籠ばけつづらだ、天幕の中の大革靴じゃあ、中うちに何が入ってるか薄気味が悪かったんで。

(へい、その鍵をおなくしなすつた……そいつはお困りで、)

と錠前の寸法を当りながら、こう見ますとね、新聞のまだ残った処に、青錆あおさびにさびた金具の口でくいしめた革靴の中から、紫の袖が一枚。……

袂たもとが中に、袖口をすんなり、白羽二重の裏が生々いきいきと、女の膚はだを包んだようで、被きた人からも思われる、裏が通つて、揚羽あげはの蝶の紋がちらちらと羽を動かすように見えました。」

小村さんと私とは、じつと見合っていたままの互の唇がぶるぶると震えたのである。

## 七

——実はこの時から数えて前々年の秋、おなじ小村さんと、(連つれがもう一人あつた。)

三人連で、軽井沢、碓氷うすいのもみじを見た汽車の中に、まさしく間違まちがうまい、これに就いた  
 事実があつて、私は、不束ふつつかながら、はじめ、淑女画報に、「革靴かばんの怪。」後に「片袖。」  
 と改題して、小集の中に編うちんだ一篇を草した事がある。

確たしかに紫の袖の紋も、揚羽の蝶と覚えている。高島田に花はな笄こうがいの、盛装した嫁入姿の窈よ  
 窕うちようたる淑女が、その嫁御寮に似もつかぬ、卑しげな慳けんのある女親まじりに、七八人の  
 附添とともに、深谷ふかや駅から同じ室に乗組んで、御寮はちようど私たちの真向うの席に就  
 いた。まさに嫁がんとする娘の、嬉しさと、恥らいと、心こころ遣やりと、恐怖おそれと、笑えみとは、  
 そのまま膝に手を重ねて、つむりを重たげに、ただ肩を細く、さしうつむいた黒髪に包ん  
 で、顔も上げない。まことにしとやかな佳人であつた。

この片袖が、隣席にさし置かれた、他の大革靴の口に挟はまつたのである。……失礼なが  
 らその革靴は、ここに藤助が饒舌しゃべるのと、ほぼ大差のないものであつた。

が、持ぬしは、意気沈んで、髻ひげ、髪もぶしようにのび、面おもては憔悴しょうすいはしていたが、素  
 純にして、しかも謹厳なる人物であつた。

汽車の進行中に、この出来事が発見された時、附添の騒ぎ方は……無理もないが、思わ  
 ぬそそ鹿そであろう、失策した人物に対して、傍はたの見る目は寧むしろる気の毒なほどであつた。

一も二もない、したたかに詫びて、その革靴の口を開くので、事は決着するに相違あるまい。

我も人も、しかあるべく信じた。

しかるにもかかわらず、その人物は、人々が騒いで掛けた革靴の手の中から、すかりと握拳にぎりこぶしの手を抜くと斉しく、列車の内へすつくと立つて、日に焼けた面は瓦の黄昏る

ごとく色を変えながら、決然たる態度で、同室の御婦人、紳士の方々、と室内に向つて、掠声かすれこえして言った。……これなる窈窕たる淑女（——私もここにその人物の言つた言を、

そのまま引用したのであるが）窈窕たる淑女のはれ着の袖を侵したのは偶然の麁である。

はじめは旅行案内を掴出して、それを投込んで錠を下した時に、うっかり挟んだものと思われる。が、それを心着いた時は——と云つて垂々と額に流るる汗を拭つて——ただ

一瞬間に千万無量、万劫の煩惱を起した。いかに思い、いかに想つても、この窈窕たる

淑女は、正しく他に嫁せらるるのである……ばかりでない、次か、あるいはその次の停車場ステエ

にて下車なさるとともにたちまち令夫人とならるる、その片袖である。自分は生

命を掛けて恋した、生命を掛くるのみか、罪はまさに死である、死すともこの革靴の片袖

はあえて離すまいと思う。思い切つて鍵を棄てました。私はこの窓から、遙はるかに北の天に、

雪を銀欄のごとく刺繡した、あの遠山の頂を望んで、ほとんど無辺際に投げたのです、と言つた。

——汽車は赤城山をその翼の窓に望んで、広漠たる原野の末を貫いていたのであつた。

渠は電信技師である。立野竜三郎と自ら名告つた。渠はもとより両親も何も無い、

最愛の児を失い、最愛の妻を失つて、世を果敢むの余り、その妻と子の白骨と、ともに、

失うべからざるものの一式、余さずこの古革鞆に納めた、むしろ我が孤の皚然たる影を

も納めて、野に山に棄つるがごとく、絶所、僻境を望んで飛驒山中の電信局へ唯今赴

任する途中である。すでに我身ながら葬り去つた身は、ここに片袖とともに蘇生つた。

蘇生ると同時に、罪は死である。否、死はなお容易い、天の咎、地の責、人の制規、いか

なる制裁といえども、甘んじて覚悟して相受ける。各位が、我ために刑を撰んで、その最

も酷なのは、磔でない、獄門でない、牛裂の極刑でもない。この片袖を挟んだ古革鞆を

自分にぶら下げさせて、嫁御寮のあとに犬のごとく従わせて、そのまま今日、日の媚君の脚

下に押し跪かせらるる事である。諾、その嚴罰を蒙りましょう、断じて自分はこの革鞆を

開いて片袖は返さぬのである。ただ、天地神明に誓うのは、貴女の淑徳と貞潔である。自

分は生れてより今に及んで、その姿を覗たのはわずかに今より前、約三十分に過ぎない、……包ましくさしうつつむかれた淑女は、申すまでもなく、自分に向つて瞳をも動かされなかつた事を保証する、——謹んで断罪を待ちます……各位。

とつとつ 唸々として、しかも沈着に、純真に、縷々この意味の数千言を語つたのが、轟々たる

汽車の中に、あたかも雷鳴を凌ぐ、深刻なる独白のごとく私たちの耳に響いた。

附添の数多の男女は、あるいは怒り、あるいは罵り、あるいは呆れ、あるいは呪詛つた。

が、狼狽したのは一様である。車外には御寮を迎の人数が満ちて、汽車は高崎に留まろう

としたのであるから……

既に死灰のごとく席に復して瞑目した技師がその時再び立つた。ここに手段がありません、

天が命ずるにあらざ、地が教うるにあらざ、人の知れるにあらざ、ただ何もの考慮

とも分らない手段である……すなわち小刀をもつて革靴を切開く事なのです。……私は拒

みません。刀ものは持合せました、と云つて、靴をパチンと抜いて渡したのを、あせつて

震える手に取つて、慳相な女親が革靴の口を切裂こうとして、屹と猜疑の瞳を技師に向

くると同時に、大革靴を、革靴のまま提げて、そのまま下車しようとした時であつた。

「いいえ！」

と一言、その窈窕たる淑女は、袖つけをひしと取って、びりびりと引切った。緋の長襦袢が※と燃える、片身を火に焼いたように衝と汽車を出たその姿は、かえって露の滴るごとく、おめき集う群集は黒煙に似たのである。

技師は真俯向けに、革靴の紫の袖に伏した。

乗合は喝采して、万歳の声が哄と起った。

汽車の進むがままに、私たちは窓から視た。人数に抱上げらるるようになって、やや乱れた黒髪に、雪なす小手を翳して此方を見送った半身の紅は、美しき血をもつて描いたる煉獄の女精であつた。

碓氷の秋は寒かつた。

八

藤助は語り継いだ。

「姉さんが、そうすると……驚いたように、

(あれ、それを見ちや不可ません。)

(やあ、ついそそ籠ろうを。)

と、何事も御意のまま、頭をすくめて恐縮をしますとね、低声こゝえになって気の毒なそうに、  
(でも、あの、そういう私が、密そつと出して、見たいんでございます。)

(そこで鍵が御入用。)

(ええ、ですけど、人様のものを、お許しも受けないで、内証うちじょうで見ても悪うございませうねえ。)

(何、開けたらまた閉めておきやあ、何でもありやしませんや。)

とその容子ようすだもの、お前さん、何だつて構まやしません。——お手軽あとしき様に言つて退のけると、口くちに袖そでをあてながら、うっかり釣つ込まれたような様子ようすでね、また前後あとしきを視みましたつけ。

(では、ちよつと今のうち鑄掛屋ちやうかけさん、あなたお職柄しやくばで鍵かぎを拵こしらえるより前に、手で開けるわけには参りませんの。)

ぶるぶるぶる……私わしあ、頭くちばしと嘴くちばしを一所いこに振ふつた。旦那めえの前まへだが、……指ゆびを曲まげて、口くちを押おえて、瞼まぶたへ指ゆびの環たまげを当あがつて、もう一度頭あたまを掉ふつた。それ、鍵かぎの手ては、内証うちじょうで遣やつても、  
たちまちお目玉めいど。……不可いけえてんだ、お前さん。

(御法度ごはつどだ。)

と重く持たせて、

(ではござれども、姉さんの事だ、遣らかしやしよう、おたてひき大達引。奥様のお記念かたみだか、何だか知らねえ。成程こいつあ、そのな、へッへッ、誰方どなたかに向つての姉さんの心意気では……お邪魔になるでございましょうよ。奥歯にものが挟まったつて譬たとえはこれだ。すつぱり、ぶちま打開けてお出しなせえまし。)

(いえ、あの、開けて出すよりか、私が中へ入りたい。)

と仇気あしけなく莞爾にっこりすら、チエーしたもんだ。

(御串戯ごじょうだんで、中へ入ると、恐怖おっかねえ、その亡くなつた奥さんの骨こつこがあるんじゃないやありませんかい。)

(もう、私は、あの、奥さまの、その骨ほねになりたいの。)

ああ、その骨になりたいか、いや、その骨でこつちは海月くらげだ、ぐにやりとなつた。

(御勝手だ。)

(あれ、そのかわりに奥さまが、活きた私におんななさる、容色きりようは、たとえばこんなでも。)

(御勝手だ。いや、御法度だね。)



(そんな事を言わないで、後生ですから、鑄掛屋さん。)

(開けますよ。だがね……)

と、一つ勿体で、

(こいつあ口伝だ、見ちや不可え、目を瞑ってしておくなさい。)

(はい。)

(もつと。)

(はい。)

(不可え不可え、薄目を開けてら。)

(まあ、では後を向きますわ。)

(引しまって、ふつくりと柔かで、ああ、堪らねえ腰附だ。)

(可厭……知りませんよ。)

と向直ると、串戯の中にしんみりと、

(あれ、ちよつと待つて下さいまし。いま目をふさいで考えますと、お許がないのに錠前を開けるのは、どうも心が済みません。神様、仏様に、誓文して、悪い心でなくつても、よくない事だと存じます。)

わつし  
私も真面目にうなずきました。

(でも、合鍵は拵えて下さいまし、大事にそれを持っていて、……出来るだけ我慢はしませぬけれども、どうしても開けたくつてならなくなりました時に、生命にかえても、開けて見とうございますから。) ——

晩の泊はどこだつて聞きますから、向うの峰の日脚を仰向いて、下の温泉だと云いますとね、双葉屋の女中だと、ここで姉さんが名を言つて、お世話しましょうと、きつい発奮さ。

御旅館などは勿体ねえ、こちらら式がと木賃がると、今頃はからあきで、人がなくつて寂しいくらい。でも、お一方——昨日から、上州高崎の方だそうだけれど、東京にも少かろう、品のいい美しい、お嬢さんだか、夫人だか、少い方がお一方……」

「お一方？」

と、うっかり訊いて私は膝を堅うした。——小村さんも同じ思いは疑いない。——あの時、その窈窕たる御寮が、汽車を棄てたのは、かここで、その高崎であつた。

「さようで。——お一方御逗留、おさみしそうなその方にも、いまの立山が聞かせたいと、何となくそのお一方が、もつての外氣になるようで、妙に眉のあたりを暗くしました

つけ、熟じつと日のかげる山を視ながめたが、

(ああ。鑄掛屋さん。)

と慌あわただしい。……皆まで聞かずと飲込んだ、旦那様帰り引と……ここらは鶺うだてね、天幕テントの逢目あいめをひよこりと出た。もとの山端やまつばなへ引退り、さらば一服つかまつ仕ろう……つぎ置の茶の中なかには、松の落葉と朱葉もみじが一枚。……」

(ああ、腹が減った……)

と色気のない声を出して、どかりと椅子に掛けたのは、焦茶色の洋服で、身の緊しまった、骨格こつかくのいい、中ちゆうぶる古の軍人といった技師の先生だ。——言うまでもなく、立野竜三郎は渠かれである——

(減った、減った、無茶に減った。)

と、いきなり卓子テエブルの上の風呂敷包みを解くと、中が古風にも竹の子弁当。……御存じはございますまい、三組みつぐみの食籠わりごで、畳むと入子いれこに重るやつでね。案ずるまでもありませんや、お道姉さんが心入れのお手料理か何かを、旅館から運ぶんだね。

(うまい、ああ旨うまい、この竹輪は骨がなくて難有ありがたい。)

余り旨そうなので、こつちは里心が着きました。建場々々で飲酒りますから、滅多に持出した事のない仕込の片餉、油揚の煮染に沢庵というのを、もくもくと頬張りはじめた。お道さんが手拭を畳んでちよつと帯に挟んだ、茶汲女という姿で、湯呑を片手に、半身で立つて私の方を覗きましたがね。

(旦那様……あの、鑄掛屋さんが、お弁当を使いますので、お茶を御馳走いたしました。……お盆がなくて手で失礼でございます。)

と湯気の上る処を、卓子の上へ置こんでございませうがね、加賀の赤絵の金々たるものなれども、ねえ、湯呑は嬉しい心意気だ。

(何、鑄掛屋。)

と、何だか、気を打ったように言つて、先生、扁平い肩で捻じて、私の方を覗きました  
が、

(やあ、御馳走はありますか。)

とかすれ笑いをしなさるんだ。

(へッ、へッ。 )と、先はお役人様でがさ、お世辞笑をしたばかりで、こちらも肩で捻向

く面だ、道陸神の首を着換えたという形だてね。

(旨い。)

姉さんが嬉しそうな顔をしながら、

(あの、電信の故障は、直りましてございますか。)

(うむ、取払ったよ。)

と頬張った含声で、

(思ったより余程さきだった。)

ははあ、電線に故障があつて、障るもの見当が着いた処から、先生、山めぐりで見廻つたんだ。道理こそ、いまし方天幕へ戻つて来た時に、段々塗の旗竿を、北極探検の浦島といった形で持つていて、かたりと立掛けて入んなすつた。

(どうかなつていましたの。)

(変なもの……何、くだらないものが、線の途中に引搦つて……)

カラリと箸を投げる音が響いた。

(うむ、来た。……トーン、トーン……可し。)

お道さんの声で、

(旦那様、何ぞ御心配な事ではございませんか。)

一口がぶりと茶を飲んで、

(詰らぬ事を……他所へ来た電報に、一々気を揉んでいて堪るもんですか。)

(でも、先刻、この電信が参りました時、何ですか、お顔の色が……)

(……故障のためですよ、青天井の煤払は下さりませんからな、は、は。)

と笑った。

坂をすると這上る、蝙蝠か、穴熊のようなのが、衝と近く来ると、海軍帽を被

つたが、形は郵便の配達夫——高等二年ぐらいな可愛い顔の少年が、ちゃんと恭しく礼を

した。

(ああ、ちようどいま繋った。)

(どうした故障でございますか。)

と切口上で、さも心配をしたらしい。たのもしいじゃあございせんか。

(網掛場の先の処だ、烏を蛇が捲いたなりで、電線に引擲つて死んでいたんだよ。

烏が引啣えて飛ぼうとしたんだろう……可なり大な重い蛇だから、飛切れないで鋼線

に留った処を、電流で殺されたんだ。ぶら下った奴は、下から波を打って鎌首をもたげた

なりに、黒焦くろこげになっていた——君、急いでくれ給え、約四時間延着だ。)

(はっ。)

と云つて行くのを、

(ああ、時さん。)

とお道さんは沈んで呼んだ。が、寂しい笑顔を向け直して、

(配達さん——どこへ……)と訊きいた。

少年が正しく立たちとど停まって、畳んだ用紙を真まっすぐに視みて、

(狼温泉——双葉館方……村上縫子……)

(そしてどちらから。)

(ヤホ次郎——行つて来ます。)

(そんな事を聞くもんじゃあない。)

(ああ、済みませんでした。)

(何、構わないようなもんじゃあるがね——どっこいしょ。)

がた、がたと音がする。先生、もう一つの卓テエブル子を引立って、猪と取組とつくむように勢いきおいよく持つて出ると、お道さんはわけも知らないなりに、椅子を取って手伝いながら、

(どう遊ばすの。)

と云ううちに、一段下りた草原くさつばらへ据えたんでございますがね、——わけも知らずに手伝った、お道さんの心持を、あとで思うと涙が出ます。」

と肩もげつそりと、藤助は沈んで言った。……

「で、何でございますよ——どう遊ばすのかと、お道さんが言うのと、心待、この日暮にはここに客があるかも知れんと、先生が言いますわ。あれ、それじゃこんな野天でなく、と、言おうじやあございませんか。

(いや、中で間違まちががあるとならんので。)

(え、間違とおっしゃって。)

とお道さんが、ひつたり寄った。

(私は、)

と先生は、肘ひじで口の端はたを横撫よこなでして、

(髻ひげもまずいが、言う事がまずくて不可いかんです。間違じやあない、故障です、素人は気なしだからして、あんな狭い天幕の中で、器械にでも障って、また故障にでもなると不可んだ。決して心配な事ではないのです、——さあ飯だ、飯だ。)



と今度はなぜか、箸を着けずに弁当をしまいかけて、……親方の手前もある、客に電報が来た様子では、また和女おまえの手も要るだろう、余り遅くならないうちにと、懇ねんごろに言うのと、

(はい、はい。)

と柔順すなおに返事する。片手間に、継掛けの紺足袋と、寝衣ねまきに重ねる浴衣のような洗濯ものを一包、弁当をぶら下げて、素足に藁草履わらぞうり、ここらは、山家で——悄悄しおしお々と天幕を出た姿に、もう山の影が薄暗く隈を取って映りました。

(今、何時だろう。)

と天幕口へ出て、先生が後姿を呼びましたね。

(……四時半頃にもなりましうか。)

(時計が止つたよ——気をつけておいで。)

と大な懐中時計と、旗竿の影を、すつくり立つて、片頬かたほ夕日を浴びながら、熟じつと落着いて視ながめていなさる。……落着いて視みちやあいなすつたが、先生少々どうかなささりやしねえのかと思つたのは、こう変に山が寂しくなつて、通魔とおりまでもしそうな、静寂しじまの鐘の唄あの塩あ梅んばい。どことなくドン——と響いて天狗倒てんぐだおしの木精こだまと一所に、天幕の中うちじゃあ、局の掛時計がコトリコトリと鳴りましたよ。

お地蔵様が一体、もし、この梟ヶ嶽の頭を肩へ下り口に立ってござる。——私どもは、どうかすると一日の中にや人間の数より多くお目に掛る、至極可懐しいお方だが……後で分りました。この丘は、むかし、小さな山寺があつたあとだそうで、そう言や草の中に崩れた石の段々が蔦と一所に、真下の径へ、山懐へまどつています。その下の径というのが、温泉宿入りの本街道だね。

お道さんが、帰りがけに、その地蔵様を拝みました。石の袈裟の落葉を払って、白い手を、じつと合せて、しばらくして、

(また、お目にかかります。)

と顔を上げて、

(後程に——)

もう先生は天幕へ入った——で、私にしみじみとした調子で云つた時の面影が忘れられねえ……睫毛にたまつて、涙が一杯。……風が冷く、山はこれから、湿っぽい。

秋の日は釣瓶落しだ、お前さん、もうやがて初冬とは言い条、別して山家だ。静に大沼の真中へ石を投げたように、山際へ日暮の波が輪になつて颯と広がる中で、この藤助と云う奴が、何をしたと思召す。

三尺をしめ直す、脚絆ほこりの埃はたを払いたり、荷にづなを天秤てんびんに掛けたり、はずしたり。……  
 三味線の糸をゆるめたり、袋に入れたり……さてまた袋を結んだり。

そこへ……いまお道さんが下りました、草にきれぎれの石段を、攀よじ攀よじ、ずつと上あがつて来た、一個ひとり、年紀としの少わかい紳士だんながあります。

山の陰気な影をうけて、凄すこいような色の白いのが、黒の中折帽をひさしさが 廂ひさしさが 下りに、洋杖ステッキも持たず腕を組んだ、背広でオオバアコオトというのが、色がまた妙に白茶けて、うそ寂しい。瘠やせて肩の立つた中脊なかせでね。これが地藏様の前へ来て、すつくりと立つたと思うと、頭髪かみの伸びた技師の先生が、ずかずかと天幕てんまくを出しました。

それ、卓テエブル子こを中に、控こえて、開ひらいて、屹きつと向合むかったと思召おもせ。

わわかか だだんなな いいんぎんんぎん  
 少すこい紳士だんなが懇こん懇こんに、

(失礼ですが、立野竜三郎氏でいらつしやいますか。)

(さよう、お尋ねを蒙こうむりました竜三郎、私わたくしであります。)

(申しおくれました、私は村上八百次郎と申すものです。はじめてお目にかかります……  
 唯今、名刺を。)

(いや。)

と先生、卓子の上へ両手をずかと支いて、

(三年前から、御尊名は、片時といえども相忘れません、出過ぎましたが、ほぼ、御訪問に預りました御用向も存じております。)

と、少いのが少し屹となつて、

(用向を御存じですか?)

(まず、お掛け下さい。)

と先生は、ドカリと野天の椅子に掛けた。

何となく気色ぼんだ双方の意気込が、殺氣を帯びて四辺を払った。この体を視た私だ。

むかし物語によくあります、峰の堂、山の祠で、怪しく凄い神たちが、神つどいにつどわせたという場所へ、破戒坊主が、はい蹲ったという体で、可恐し可恐し、地藏様の前に踞んで、こう、伏拝む形をして、密と視たんで。

先生は更めて、両手を卓子につき直して、

「——受信人、……狼温泉二葉屋方、村上縫子、発信人は尊名、貴姓であります。

コンニチゴゴツク。ヨウイ(今日午後着く。用意)」

と聞きも済まさず、若い紳士は、斜に衝と開いて、身構えて、

（何、私信を見た上、用件を御承知になりましたな。）

「偏ひとえに申訳をいたします。電報を扱います節、文字もんじは拾いますが、文字は普通……拾いますが、職務の徳義として、文字は綴りましても、用件は記憶しません。しかるところ、唯今申上げました（コンニチゴゴツク、ヨウイ）で、不意に故障が起りました、幾度も接続を試みますうちに、うかと記憶に残ったのです。のち四時間、やっと電線が恢かい復ふくして

（ヨキカ）と受信しましたのです。謹んで謝罪いたします。」

と面おもてを上げ、乾からびた咳せきして、

「すなわち、受信人、狼温泉、二葉屋方、村上縫子。発信人、尊名、貴姓、すなわち、

（今日午後着く。用意よきか。）」

（分りました。）

と静しずかに言う時、ふと見返った目が、私わつしに向いた、と一所にな……先生の眼まなこも光りました。怯おびえて立つたね、悚然ぞととした。

荷を担いで、ひよろろ、ひよろ。

ようやく石段の中ほどで、吻ほっと息をして立つた処が、薄暮うすくれあい合あいの山すこの凄すこさ。……天秤てんべんか  
ついだ己うぬが形なりが、何でございますかね、天狗様てんぐさまの下男しもやうが清水しみずを汲くみみに山一つ彼方あなたへといつ

た体で、我ながら、余り世間離れがした心細さに、

(ほつ、)

と云つたが、声も、ふやける。肩をかえて性根だめしに、そこで一つ……

(鑄掛——錠前の直し。)

何と——旦那。」

九

「……時に——雪の松たいまつ明が二把わ。前後あとさきに次第に高くなつて、白い梟ふくろ、化梟、蔦つた葛かずらが鳥の毛に見えます、その石段を攀よじるのは、まるで幻影まぼろしの女体が捧げて、頂の松、電信柱へ、竜燈あがが上るんでございました。

上り果てた時分には、もう降っているのが止やまりました。根雪に残るのじゃあございませぬ、ほんの前触れで、一きよめ白くしましたので、ぼつとほの白く、薄鼠に、梟の頂がが暗夜やみに浮いて見えました。

苦しい時ばかりじゃあねえ。こんな時も神頼み、で、私は崖縁がけふちをひよいと横へ切れて、

のしこと地蔵様の背後うしろに蹲しゃがみ込んで覗のぞいたんで。石像のお袈裟けさの前へは、真白まっしろに吹掛かけけましたが、うしろは苔こけのお法衣ころものまま真黒まっくろで、お顔が青うごぎいましたよ。

大方いまの雪のために、先生も、客人も、天幕てんまくに引籠ひきこったんでございましょう。卓テエブ子ルばかりで影もない。野天のてんのその卓子たけこが、雪で、それ大理石。——立派りっぺいやかなお座敷ざしきにも似合にあわねえ、安火鉢あんかの曲ゆがんだやつが転ころがるように出ていました。

その火鉢へ、二人が炬火たいまつをさし込みましたわ。一ふさり臥ふさつて、柱はしらのように根を持つて、赫かつと燃もえます。その灯あかりで、早はやや出端でばなに立たつて出でかかった先生方せんせい、左右さゆうの形かたちは、天幕てんまくがそのままの巖がん石せきで、言いわねえ事ことじゃあねえ、青あおくまた朱しゆに刻きみつけた、怪あやしい山神さんじんに、そつくりだね。

ツツとあとへ引ひいて、若い紳士だんなが、卓子たけこに、さきの席せきを取とつて、高島田たかしまの天人てんじんを、

(縫子ぬいこさん。)

と呼よびました。

御婦人ごふじんが、髪かみの吹流ふきなを取とつた、気高けだかい顔かほは、松明しょうめいの火ひに活いき々と、その手拭てぬぐいで、お召めいのコオトの雪ゆきを払はつていなすつたけ、揺ゆれて山茶花さざんかが散ちるようだ。

(立野たちのさんに御挨拶ごあいさつをなさい。)

(唯今。)

と静しずかに言つて、例の背後せなかに掛けた竹の子笠を、紐を解いて、取りましたが、吹添つて、風はあるのに、気で鎮めたかして、その笠が動きもしません。

卓子の脚に、お道さんのと重ねて置いて、

(貴方あなた——御機嫌よう。)

(は。)

と先生は一言云つたきり、顔も上げないで、めり込むように深く卓子の端についた太い腕が震えたが、それより深いのは、若旦那の方の年紀としとも言わぬ額に刻んだ幾筋かの皺しわで、短く一分刈かと思える頭つぶりは、坊さんのようで、福々しく耳の押立おったつて大いおおきのに、引締つた口が窪んで、大きく見えるまで、げっそりと頬の肉が落ちてゐる。

(夫人おくさん。)

と先生はうつむいたままで、

(再び、御機嫌の顔を拝することを得まして、私わたくし一代の本懐です。生れつきの口不調法が、かく眼まのあたり前に、貴方のお姿に対しましては、何も申上げる言ことばを覚えませんが、ただしかし、唯今。)



と、よろめいて立つて、椅子の手にすが縋りました。

(唯今、一言御挨拶を申し上げます。)

と天幕に入ると、提げて出た、卓子を引抱ひっかかえたようなものではない、千仞せんの重さに堪えない体ていに、大革鞆を持った胸が、吐呼吸といきを浪に吐つく。

それと見ると、蓑みのを絞しぼつて棄すてました、お道さんが手を添そえながら、顔を見ながら、搦からんで、縋もつれて、うっかりしたように手伝う姿は、かえつて、あの、紫の片袖に魂が入つて、革鞆を抜けたように見えました。

ずしりと、卓子の上に置くと、……先生は一足退さがつて、起立なりの形で、

(もはや、お二方に対しましては、……御夫婦に向いましては、立つて身を支えるにも堪えませんが、一刻も早くこの人畜にんちくの行爲おこないに対する、御制裁を待ちます。即時に御処分のほどを願います。)

若旦那が、

(よろしいか。)

とちと甘いほどな、この場合優しい声で、御夫人に言いました。

(はい。)

と、若奥様は潔い。

若旦那はまつすぐに立直つて、

(立野さん。)

(……………)

(では、御要求をいたします。)

(謹んで承ります、一点といえども相背きはいたしません。)

(そこに、卓子の上に横にお置きなさいました、革靴を、縦にまつすぐにお直し下さい。)

(承知いたしました——いやいや罪人の手伝をしては、お道さん、汚れるぞ。)

と手伝を払つて、しつかとその処へ据直す。

(立野さん。貴下は革靴の全形と折おり重かさなつて、その容量を外れない範囲内にお立ち下さい。

縫子が私の妻として、婚礼の日の途中、汽車の中で。)

と云う声が少し震えました。

(貴下に、その紫の袖を許しました、その責せめに任ずるために、ここに短銃ピストルを所持しております、——その短銃をもつてここに居て革靴を打ちます。弾丸をもつて錠前いを射切きるのです。錠前うちきを射切つて、その片袖を——同棲三年間——まだ純真なる処女の身にして、私

のために取返すんです。袖が返るとともに、更めて結婚します。夫婦になります。が、勿論しかし、それが夫婦のもの、身の終結になるかも分りません。なぜと云うに、革靴と同時に、兇器をもつて貴下のお身体に向うのです。万一お生命を縮めるとなれば、私はその罪を負わねばならないのですから。それは勿論覚悟の前です……お察し下さい、これはほとんど私が生命を忘れ、世間を忘れ、甚しきは一人の親をも忘れるまで、寢食を廃しまして、熟慮反省を重ねた上の決意なのです。はじめは貴方が、当時汽車の窓から赤城山の絶頂に向つて御投棄てになつたという、革靴の鍵を、何とぞして、拾い戻して、その鍵を持ちながらお目にかかつて、貴下の手から錠を解いて、縫のその袖を返して頂きたいと存じ、およそ半年、百日に互りまして、狂と言われ、痴と言われ、愚と言われ、嫉妬と言われ、じんすけと嘲けられつつも、多勢の人数を狩集めて、あの辺の汽車の沿道一帯を、粟、蕎麦、稻を買求めて、草に刈り、芥にむしり、甚しきは古塚の横穴を発いてまで、捜させました。流星のごとく天際に消えたのでしよう、一点似た釘も見当りません。——唯今……要求しますのは、その後の決心である事を諒として下さいまし。縫もよくこの意を体して、三年の間、昼夜を分かず、的を射る修練をいたしました。——最初、的をつくります時、縫がものさしを取つて、革靴の寸法を的に切りましたが、ここで実物を拝見しま

すと、その大<sup>おお</sup>きと言<sup>い</sup>い、錠<sup>じやう</sup>前<sup>まへ</sup>のある位置<sup>ち</sup>と言<sup>い</sup>い、ほとんど寸分<sup>すんぶん</sup>の違<sup>ちが</sup>いもありません。……不思議<sup>ふしぎ</sup>です。……特に奇蹟<sup>きせき</sup>と存<sup>ぞん</sup>じますのは、——家の地続<sup>ぢぞく</sup>きを劃<sup>しき</sup>つて、的場<sup>てきば</sup>を建てましたのですが、土地<sup>ちど</sup>の様子<sup>ようす</sup>、景色<sup>けいしき</sup>、一本<sup>いっぴん</sup>の松<sup>まつ</sup>の形<sup>かたち</sup>、地蔵<sup>ぢざう</sup>のあるまで。)

——私<sup>わつし</sup>はすくんだね——

(夢<sup>ゆめ</sup>のようによく似<sup>に</sup>ています。……多分<sup>たぶん</sup>、皆<sup>みな</sup>お互<sup>たがひ</sup>に、こうした運命<sup>うんめい</sup>だと存<sup>ぞん</sup>じます。……短<sup>たん</sup>銃<sup>じゆう</sup>は特に外国<sup>がいこく</sup>に註文<sup>しゆもん</sup>して、英国<sup>えいこく</sup>製の最優良<sup>さいゆうりやう</sup>なのを取寄<sup>と</sup>せました。連発<sup>れんぱつ</sup>ですが、弾丸<sup>だんがん</sup>はただ一つしか籠<sup>こ</sup>めてありません、きつと仕損<sup>しそん</sup>じますまい。しかし、御覚悟<sup>ごかくご</sup>を下<sup>くだ</sup>さいまし。——もつとも革靴<sup>かきつ</sup>と重<sup>かさ</sup>つてお立ち下<sup>くだ</sup>さいますのに、その間隔<sup>けんかく</sup>は、五間<sup>ごかん</sup>、十間<sup>じゅうかん</sup>、あるいは百間<sup>ひゃくかん</sup>、三百間<sup>さんびゃくかん</sup>、貴下<sup>あなた</sup>の、お心に任せ<sup>まかせ</sup>ます。要<sup>よ</sup>はただ、着弾距離<sup>てつだんきり</sup>をお離<sup>はな</sup>れになりません事です。)

(一歩<sup>いっぽ</sup>もここを動<sup>うご</sup>きません。)

先生<sup>せんせい</sup>は、拱<sup>こまぬ</sup>いた腕<sup>うで</sup>を解<sup>と</sup>いて言<sup>い</sup>いましたぜ。」

——そうだろうと、私<sup>わたし</sup>たちも思<sup>おも</sup>つたのである。

「堪<sup>たま</sup>らねえやね。お前さん。

私<sup>わつし</sup>あ猿<sup>えてんぼ</sup>坊<sup>ぼ</sup>のように、ちよろりと影<sup>うね</sup>を畝<sup>うね</sup>つて這<sup>はい</sup>出して、そこに震えて立っている、お道姉さんの手に合鍵<sup>あつかい</sup>を押<sup>お</sup>つけた。早く早く、と口<sup>くち</sup>じやあ言<sup>い</sup>わねえが、袖<sup>そで</sup>を突<sup>つ</sup>いた。

——若奥<sup>わくおく</sup>様の手<sup>て</sup>が、もう懐<sup>ふところ</sup>中<sup>ちゆう</sup>に入<sup>い</sup>った時<sup>とき</sup>でございますよ。

(御免<sup>ごめん</sup>遊<sup>あそ</sup>ばせ。)

と紐<sup>すな</sup>りつくように、伸上<sup>のびあ</sup>つて、お道<sup>みち</sup>さんが鍵<sup>かぎ</sup>を合<sup>あ</sup>せ合<sup>あ</sup>せするのが、あせるから、ツルツルと二三度<sup>さんさんど</sup>迂<sup>ま</sup>りました。

(ああ、ちよつと。)

と若奥<sup>わくおく</sup>様が、手<sup>て</sup>で圧<sup>おさ</sup>えて、

(どうぞ……そればかりは。)

と清<sup>すず</sup>しく言<sup>い</sup>います。この手<sup>て</sup>二<sup>ふた</sup>つが触<sup>ふ</sup>つたものを、錠<sup>じやう</sup>前<sup>まへ</sup>の奴<sup>やつ</sup>、がんとして、雪<sup>ゆき</sup>になつても消<sup>き</sup>えなんだ。

舌<sup>こわ</sup>の硬<sup>こわ</sup>ばつたような先生<sup>せんせい</sup>が、

(飛<sup>と</sup>んでもない事<sup>こと</sup>——お道<sup>みち</sup>さん。)

(いいえ、構<sup>かま</sup>いません。)

と若旦那はきつぱりと、

(飛んでもない事ではありません。それが当然なのです。立野さん。貴下あなたが御自分でなくつても、貴下が許して、錠前をさえお開き下さるなら——方法は拵えらびません。短銃ピストルなんぞ何になりましょう、私はそれで満足します。)

(旦那様。)

と精一杯で、お道さんが、押留められた一つの手を、それなり先生の袖に縫って、無量の思おもいの目を凝らした。

(はあ、)

と落込むような大息して、先生の胸が崩れようとしていますと。

(貴方、……あの鍵が返りましたか。……優しい、お道さん、美しい、姉さんねえ、……お優しい、お美しい姉さんに、貴方はもうお心が移りましたか。)

と云って、若奥様が熟じゅと視みました。

先生が蒼くなつて、両手でお道さんを押除おしのけながら、

(これは余所よその娘です、あわれな孤児みなしごです。)

とあとが消えた。

(決行なさい、縫子。)

(……………)

(打て、お打ちなさい。)

(唯今。)

と肩を軽く斜めに落すと、コオトが、すつと脱げたんです。煽りもせぬのに気が立って、颯と火の上の松明より、紅に燃立つばかり、緋の紋縮緬の長襦袢が半身に流れました。……袖を切つたと言う三年前の婚礼の日の曠衣裳を、そのまま、一方紫の袖の紋の揚羽の蝶は、革鞆に留まつた友を慕つて、火先にひらひらと揺れました。

若奥様が片膝ついて、その燃ゆる火の袖に、キラリと光る短銃を構えると、先生は、両方の膝に手を垂れて、目を瞑つて立ちました。

(お身代りに私が。)

とお道さんが、その前に立塞がった。

「あ、危い、あなた。」

と若旦那が声を絞つた。

若奥様は折敷いたままで、

(不可いけません——お道さん。)

(いいえ、本望でございます。)

(私わがが肯ききません。)

と若奥様わがうらが頭かぶりを掉ふります。

(貴方が、お肯きき遊あそばさねば、旦那様旦那様にお願い申上げます。こんな山家の女でも、心にかわりはござんせん、願ねがいを叶かなえて下さいまし。お情なさけはうけませんでも、色も恋も存ぞんじております。もみじを御覧ごらんなさいまし、つれない霜にも血を染めます。私はただ活いきておりますより、旦那さんのかわりに死にたいのです。その方が嬉しいのです。こんな事があろうと思つて、もう家を出ます時、なくなつた母親かたみの記念かたみの裾模様すそもようを着て参りました。……手織ており木綿かたみに前垂まえだれした、それならば身分相応身分相応ですから、人様の前に出られます。時おくれの古もんつきい紋もんつき着、襦袢むすひも帯もうつりません、あられもないなりをして、恋かたきの奥様おくさまと、並んでここへ参りました。ふびんと思つて下さいまし。ああ女は浅間あさましい、私にはただ一枚、母親かたみの記念かたみだけれど、奥様のお姿と、こんなはかないなりをくらべて、思う方の前まへに出るのは死ぬよりも辛あつうござんす。それさえ思い切りしました。男のために死ぬのです。冥みょう加かに余あまつて勿体ない。……ただ心こころがかりなは、私わたしと同じ孤みなしご児ごの、時ちゃん——少年せうねんの配達夫はいだつぷ——



の事ですが、あの児も先生おもいですから、こうと聞いたら喜びましょう。）

若旦那の目にも、奥様にも、輝く涙が見えました。

先生は胸に大波を打たせながら、半ば申じょうだん戯ごにするように、手を取って、泣な笑わらいをして、

（これ、馬鹿な、馬鹿な、ふふふ、馬鹿を事を。）

（ええ、馬鹿な女でなくつては、こんなに旦那様の事を思いはしません。私は、馬鹿が嬉しゅうございます。）

（弱った。これ、詰つまらん、そんな。）

（お手間が取れます。）

（さあ、お退どき、これ、そつちへ。）

（いいえ、いいえ。）

否いやいや々やをして、頭かぶりをふつて甘える肩を、先生が抱いて退どけようとするなり、くるりとうしろ向きになつて、前髪をひしと胸に当てました。

呼吸いきを鎮しずめて、抱いだいた腕を、ぐいと背中へ捲まきました、が、

（お退どきと云うに。——やあ、お道さんの御母君おん、御母堂ご、お記念かたみの肉身と、衣類に対し

て失礼します、御許し下さい……御免。）

と云うと、抱倒して、

（ああれ。）

と震えてもがくのを、しかと片足に踏据えて、仁王立にすつくと立った。

（用意は宜しい。……縫子さん。）

（……………）

（……………）

（さようなら……………）

（……………さようなら、貴方。）

日光の御廟おたまやの天井に、墨絵の竜があつて鳴きます、尾の方へ離れると音はしねえ、頤あごの下の低い処で手を叩くと、コリンと、高い天井で鳴りますので、案内者は、勝手に泣竜と云うのでございますが、同じ音で。――

コリンと響いたと思うと、先生の身体からだは左右へふらふらして動いたが、不思議な事には倒れません。

南無三寶。

片手づきに、白襟の衣紋えもんを外らして仰向きあおむになんすつた、若奥様の水晶のような咽喉のどへ、口からたらたらと血が流れて、元結もつとが、ぷつりと切れた。

トタンにな、革靴の袖が、するすると抜けて落ちました。

(貴方……短銃ピストルを離しても、もう可うよございますか。)

若旦那ひざまずが跪ひざまずいてその手を吸うと、釣鐘を落したように、軽そうな手を柔かに、先生の膝に投げて、

(ああ、嬉しい。……立野さん、お道さん、短銃をそちらへ向けて打つような女とお思いなさいましたか。)

(只今ただいま、立処たちどころに自殺します。)

と先生の、手をついて言うのをきいて、かぶりを掉ふつて、櫛くし笄こうがいも、落ちないで、乱れかかる髪をそのまま莞爾にっこりして、

(いいえ、百万年の後のちに……また、お目にかかります。お二方に、これだけに思われて、縫は世界中のしあわせです——貴方、お託わびは、あの世から……)

最後の言葉でございました。」

「お道さんが銀杏返いちろうがえしの針を抜いて、あの、片袖を、死骸の袖に縫つけました。

その間、膝にのせて、胸に抱いて、若旦那が、お縫さんの、柔かに投げた腕かいなを撫で、撫で、

（この、清い、雪のような手を見て下さい。私の偏執と自我と自尊と嫉妬のために、詮せんずるに烈はげしい恋のために、——三年の間、夜よに、日に、短銃ピストルを持たせられた、血を絞り、肉を刻み、骨を砂利にするような拷掠ごうりやくに、よくもこの手が、鉄にも鉛にもなりませんでした。ああ、全く魔のごとき残虐にも、美しいものは滅びません。私は慚愧ざんきします。しかし、貴下あなたと縫子とで、どんなにもお話合のつきますように、私に三日先立って、縫子をごちらによこしました、それに、あからさまに名を云って、わざと電報を打ちました。：：貴下あなたを当電信局員と存じまわしていたした事です。とにかく私の心も、身の果はても、やがて、お分りになりました。）

と、いいいい、地藏様の前へ、男が二人で密そつと昇かっぐと、お道さんが、笠を伏せて、その上に帯を解いて、畳んで枕にさせました。

私も十本の指を、額に堅く組んで頂いて拜わっしんだ。

そこらの木の葉を、やたらに火鉢にくべながら……

(失礼、支度をいたしますから。)

若旦那がするすると松の樹の処へ行きま<sup>ゆ</sup>す。

そこで内証で涙を払うのかと憫うと、肩に一<sup>ひと</sup>揺り、ゆすぶりをくれるや否や、切<sup>き</sup>立<sup>た</sup>ての崖の下は、剣を植<sup>つるぎ</sup>えた巖<sup>いわ</sup>の底へ、真逆<sup>まっさかさま</sup>様。霧の海へ、薄<sup>うす</sup>ぐろく、影が残<sup>こ</sup>つて消<sup>き</sup>えませ<sup>ん</sup>。

——旦那方。

先生を御覧なせえ、いきなりうしろからお道さんの口へ猿<sup>さる</sup>轡<sup>ぐつわ</sup>を嵌<sup>は</sup>めましたぜ。——

一人は放<sup>はな</sup>さぬ、一所に死<sup>し</sup>のうと悶<sup>もだ</sup>えたからで。——それをね、天幕<sup>テント</sup>の中へ抱<sup>か</sup>入れて、電信<sup>テエブル</sup>事務<sup>テエブル</sup>の卓<sup>テエブル</sup>子<sup>テエブル</sup>に向けて、椅子<sup>いす</sup>にのせて、手<sup>て</sup>は結<sup>ゆわ</sup>えずに、腰<sup>こし</sup>も胸<sup>むね</sup>も兵児<sup>へいご</sup>帯<sup>おび</sup>でぐるぐる巻<sup>ま</sup>だ。

(時夫の来るまで……)

そう言<sup>い</sup>つて、石段<sup>いしだん</sup>へずつと行<sup>ゆ</sup>く。

私<sup>わし</sup>は下<sup>おり</sup>口<sup>くち</sup>まで追掛<sup>おっか</sup>けたが、どうして可<sup>い</sup>いか、途方<sup>とほう</sup>にくれてくるくる廻<sup>ま</sup>つた。

お道<sup>みち</sup>さんが、さんばら髪<sup>かみ</sup>に肩<sup>かた</sup>を振<sup>ふ</sup>つて、身悶<sup>みもだ</sup>えすると、消<sup>き</sup>えかかった松明<sup>まつあき</sup>が赫<sup>かつ</sup>と燃<sup>も</sup>えて、あれあれ、女<sup>め</sup>の身<sup>み</sup>の丈<sup>だけ</sup>に、めらめらと空<sup>そら</sup>へ立<sup>た</sup>つた。

先生の身体<sup>からだ</sup>が、影<sup>かげ</sup>のように帰<sup>かえ</sup>つて来<sup>き</sup>て、いましめを解<sup>と</sup>くと一所<sup>いしょ</sup>に、五<sup>ご</sup>体<sup>たい</sup>も溶<sup>と</sup>けたような

お道さんを、確しかと腕うでに抱かきました。

いや何とも……酔よつた勢いきほいで話わしましたが、その人たちの事を思うと、何とも言いようがねえ。

実は、私わつしと云うものは……若奥様には内証うちしやうだが、その高崎の旦那に、頼たのまれて、技師の方が可いい、とさえと一言ひとこと云いえば、すぐに合鍵あひかぎを拵こしらえるように、道中お抱かえだつたので。……何、鍵かぎまでもありません。——天幕てんまくでお道さんが相談さうだんをしました時、寸法すんぽうを見るみるふりをして、錠じやうは、はずしておいたんでございますのに——

皆、何とも言いようがねえ、見てござつた地藏様にも手のつけようがなかつたに違ちがえねえ。若旦那のお心持こころもちも察さして上げておくんなせえ。

あくる日そばみち咄づつ道みちを伝ついますと、山から取とつた水樋みづづいが、空を走まつて、水みづ車ぐるまに颯さつと掛かります、真紅まつかな木の葉はが宙そらを飛とんで流ながれましたつけ、誰たれの血ちなんでございましょう。「

(峰みねの白雪ふゆ麓もとの氷)

今は互たがひに隔へてていれど)

あとで、鑄掛屋ちやうかけに立山たちやまを聴きいた——追善おひつぎの心こころである。皆涙みななみだを流ながした……座ざは通夜とうやのよう

であつた。

姨捨山の月霜にして、<sup>はてし</sup>果なき谷の、<sup>もや</sup>暗き霧の底に、千曲川は水晶の珠数の乱るるごとく流れたのである。

大正九（一九二〇）年十二月





# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、「安達《あだち》ケ原」「梶《ふくろ》ケ一嶽《たけ》」は小振りに、「焼《やけ》ケ嶽」は大振りにつくっています。

※誤植の確認には底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 唄立山心中一曲

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>